



緝珠

地

白石先生
覽書

1卷
400
2



明 15
號 400
卷 2

サキチヤウ



仙珠中巻

新井瓦屋原石義孝

爆竹、子壽万半とよひひく、ハ男流奇、
とて京中の男、女多う記つて、内程、
初をいひて、年せと、持統天皇の御
時、長瀬人、結おゆ、冬ち、
況のう、く、お、れ、き、
り、北、事、

大谷藏
九月九日
年
購



あまのこゝ事いふ事いふ事いふ事
きしうの端は端いりちをり由愛と信れハ
信といふ事いふ事いふ事いふ事
とと取な信り

今日瑞々氷々氷と仁徳の由代すい
祇園會此等此日公衆衆極く是業の由故
をいふ事いふ事いふ事いふ事
承る事いふ事いふ事いふ事

青々木目いり 都傳をいふ事いふ事
けり事いふ事いふ事いふ事いふ事
と業中いりいふ事いふ事いふ事
情もいふ事いふ事いふ事いふ事
を因いり青々木目いりいふ事いふ事
つたるいふ事いふ事いふ事いふ事
ふもいふ事いふ事いふ事いふ事
たのいふ事いふ事いふ事いふ事

三日月ノ後

九

い侍一山崎もとりよにほくらりよと
神のらばいふてすらふらんやと世を神
の名ふかこのりぬの一一時神のたをさ
のともれをけくあまを一一て一一いさ
かに感一きく思一して出たの一一し神も物
知てさるるもの也

うか月振とて世に空のつ所よりし
しちり一一と一一あはれまはる門も右宮二日

八

おち一一いふもく一一のたを物を起
も一一いふのた一一のたをす
もいふのた一一のたをす
あか一一いふは世の園白の地つたあ
一一いふは世の園白の地つたあ
て一一いふは世の園白の地つたあ
一一いふは世の園白の地つたあ

七夕仙翁花をくふあゝ事ハ七月迄也乞

七夕ノ仙翁花

又暖流の流しに 着きかへし 一歩も
始りたるも 一歩も 一歩も 一歩も

菊も 一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

一歩も 一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

の 一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

か 一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

途 一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

て 一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

一歩も 一歩も 一歩も 一歩も

すいせいのあはれにうらなひを
しるすまはるる日なきとあり
あしきことらひのちかんと
いふこと

きこしの比をうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに

あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに

あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに
あはれにうらなひにうらなひに

物さくつちのうささのまゝにせしめられ長
 小ころりたるはむの伝ふりし上二人よりカキ
 ありては候と云ふしと又くつりてられ
 のすくまる無の傳風をうりして羊の
 へんそそくくふらふらふと云ふる
 十月廿七日とせし伝ふりしとするまの
 ありしにありしとせしと傳ふりしとす
 紫とせし伝ふりしとせしと傳ふりしとす

史焼

事は傳ふるまの始とせし伝ふりしとす
 とせしと無を傳ふりしとせしとす
 一時傳ふりしとせしと傳ふりしとす
 同名傳ふりしとせしと傳ふりしとす
 ありしと無を傳ふりしとせしとす
 ありしと無を傳ふりしとせしとす
 ありしと無を傳ふりしとせしとす
 ありしと無を傳ふりしとせしとす

ハ燒きり 後神ゴカウを來のめし人をもて玉化
の人よりあひ庭をるるをてあしきもき
なりあしき人なるいふ
在世後同巻に後成國なる猿岡の町し人
流んとてみよの娘のあをしにまはあは
のしきあしき人なるいふ
より若れれとあしき人なるいふ
まは流るるをいふ人なるいふ

と知りて海をるるしにわがのありあ
しき人なるいふ
たりきり此國流のあしき人なるいふ
のあしき人なるいふ
はらちりしるあしき人なるいふ
つとあしき人なるいふ
あしき人なるいふ

天文廿三曆中庚午旬

よき御家の御座りしは信あり御教にて一
る中と海ありて御家とるれり
仁の乱りありし多氏ありしは
つらにありしは古方の業ありし信陽也
帝の御座りし古方の業ありしを借りし
めしてこそ御教起りしめんありし故あり
氏の御ありし世ありしは信を成せし
さしゆりしは古方の業ありしは
一

へいれきりしは古方の業ありしは
人きりしは古方の業ありしは
長きありしは古方の業ありしは
ちりありしは古方の業ありしは
おの御ありしは古方の業ありしは
承し古の古は古方の業ありしは
て御ありしは古方の業ありしは
信を成せしは古方の業ありしは
一

を捕らひて子姪を御探せしむらうしんて
衣を穿て他を命を断るなり等なり
ししは久世の事なりと云ふは傳申候して天
とあり候にぬれを多しと云ふ事候なり
候事と此入ぬると申れしなり
處有と此少時此田に傳候と申甲別の信
去北條ありと申甲別此北條に此傳候に
候と云ふんことし候事なり申甲別の長

道事としんて信玄のしんてと云ふハニ信別
信玄外傳に據河内河内を取此等所信玄の經
馬と云ふし候事なり此之候事なりと云ふ
事候しんて此長事なりと云ふられし
と云ふ一語なりし候事なり此長事
守父子信玄に傳候なり此子ありて
能事なりと云ふ事候事なり此事候事
と云ふ事候事なり此事候事なり

寺上人孫寺師ハ己之くーとて如く破却一
 上退却せりり此情ハ其由之由之
 又抑おたるの如し到ハ其由之由之
 借束の寺達をを見くーとて如く破却一
 寺の如くー
 二階寺ハ其由之
 ○而能之由之
 後其位ト在系有資連望此ハ伯孫人伝達近
 元の比のくー

舟由ハ其由之 武為如るハ其由之
 即古率少其能居也 後其位ト連其の比之
 寺ハ少其資原其の如く
 其由之孫氏ハ其由之 下地居也 其由之
 寺ハ二寺武師 其由之 家河の寺ハ其由之
 後其位ト其由之 後其位ト其由之
 先其家河の寺ハ其由之
 子孫氏胤ハ其由之 其由之 其由之

明皇治以九十三日卒也少信与氏叔牙之子
 子象亮胤八世后信与氏位下称东院正七
 二古卒于千系女胤親王子也
 高城胤辰信与位下下也信与信之曾孙也
 了古二十古卒于千系氏族也

本日本代入 明皇治以信与位下
 高城胤辰信与位下下也信与信之曾孙也
 了古二十古卒于千系氏族也

○ 成昌胤

後五位下 分勝胤子
 天文十九年 正七年

利胤

分五下
 弘治三十七年

親胤

分五下
 天正七 四被殺

胤富

分五下
 天正十三 五七年

邦胤

分五下 天正十六年
 配酒手又家士 兼田
 万五郎 揮力 佛邦胤
 遂病 劍卒

重胤

分五下 寬永十六
 十六年

方乃乃 浮氏也

○ 依竹 後古信下 七也 仍皇 在島 孫 信 古 原 急 元

七十以年^卒大孫を以孫を以

後古信下在常孝之孫仁孝之上孫富定子為

佐井孫厚孝子要之女孫仁元十二口孫死

又

後古信下伊豫守孫仁の子文明元十一口卒

孝子後古信下其子孫治号一孝齋迄也

二口口口卒

後古信下在常孝之孫仁孝之子孫照子之孫

長十七口十九卒

後古信下之孫也。○女實と申す之孫也

人常信守信下其子孫仁孝明子人孫

中本孫孫田氏族家孫列一列如也

○陶ハ多之良氏也。○中世列信名常信下

也也善之也人其子之其子在常孝之下常和

○松田ハ孫常氏也。○新田孫信守信下

孫常守信永正北の人

○後醍醐天皇御時、位下攝津守、後乃伊丹、堀天
正六年、謀叛、七年、潛逃、都回、東遷、陸奥、去
○撰名、切立、為、取、取、支、任、將、年、義、船、山、越、人、之
○石田、本、之、院、正、信、三、城、兄、之、義、氏、也

○大谷、刑、部、ハ、三、階、氏、也

○秋月、ハ、大、谷、氏、也

○山中、ハ、山、内、守、也、後、攝、氏、也、常、山、所、理、之、時、義、氏、也

○土、方、河、内、守、堀、久、ハ、彦、太、守、也、後、氏、也、九、郎、家

○河、内、守、内、守、攝、定、降、子、義、原、氏、也

○田、中、之、部、守、攝、長、政、攝、氏、也、○聖、白、ハ、滋、理、氏、也

○堀、尾、為、助、立、宗、氏、也、○平、名、守、之、次、ハ、弓、削、守、也

○新、津、後、河、守、義、原、氏、也、○中、川、後、河、守、氏、也

○多、田、在、近、江、守、義、原、氏、也、○新、月、長、丸、新

○守、之、子、也

○河、内、守、攝、長、政、利、台、守、守、人、石、道、在、中、將

○攝、長、守、之、子、守、利、也

○澁川守之信内之長平信確揚仕置白長平
垂吉賜羽柴氏

○依地為氏

○氏家存隆入道十合子信少信十志存元政美

○氏之長曾孫部八茶氏之○片桐八信氏之且元ハ

○信少之長曾孫子始也貞直之云之身之信貞

○信ハ加多由之云

○新田信ハ信少信貞之孫也

○吉田城部正為平信 ○松倉ハ信氏之

○尾田信氏之 ○尾田信の知信ハ信氏之長

ハ十月信部正為平信 ○永井右近の孫也信ハ大

長田守之長平守元子之

○信ハ右平氏之長曾孫の孫也信少信少信少信少信少

○山城守守元守元守元守元

○信少守元守元守元守元

○出治守元守元守元守元

定考 胎方房 休了本氏族 上戸 古河 山 秀伝

子

○大徳 平清幹 相幹 也子 卯 西 常陸 水戸 津 指

移 居 津 津 魚 永 手 中 之

○堀川氏 官 道 親 元 義 人 自 増 才 子 新 五 志

と云 利 發 名 上 骨 骨 和 敬 子 丹 新 五 志 親

也 利 發 名 道 標 告 也 及 和 敬

○館 尾 氏 古 河 山 之 官 常 房 長 孫 比 人

○高 原 小 三 五 原 氏 族 源 氏 也 ○在 江 井 伊 吉 治 原

氏 之 治 中 三 子 之 人 主 治 下 之 人

○在 江 井 伊 吉 治 原 元 氣

○棟 中 原 七 子 信 亮 隸 細 川 氏 官 治 原 系 之 故 避

去 又 之 小 河 川 島 嶋 子 形 人

○堺 和 小 原 氏 之 子 人 源 人 細 川 隸 氏

○第 原 寺 八 崎 之 ○芳 賀 八 崎 氏 之 ○別 稱 小 寺

長 治 八 崎 寺 八 崎 寺 原 氏 之

○筒井信康與善長之 筒井康房順昭天文

○十九年没子順昭小字多信大和守信長号陽

○康房天文十一丑十三日没

○安之江之可成元龜文四十九江迎江本之我

○死年也十八越后守善子源氏之

○梅ノ小守源氏之 玉田日一

○お月守入越后守 移家氏族日下部之

○周江曾何屋人四守梅守子任少子氏源氏改

○近国氏後以周白秀吉卒改今氏

○伊集院不步之入後高志持部 幸信之

○尾ノ佐治ハ平氏之 上花押教下

古也傳之佐治平一成高ノ佐子也成田佐高也利賢
号巨哉 定永十一年九月九日没 年六

一 越前守家可也定宗ハ信別、幸田ノ陣ノ後

以之又之知リ、六万石在任也一ノ

此名也及之、之國ノ古也此傳之流也

以上恒齋談也

吉田氏

一 吉田兼治

兼徳

兼英 — 兼起 — 万丸

今の吉田氏

豊光太閤を豊国と号しし時社務殿小
兼治の嫡子兼徳を捕せしめて新井と稱して
新井と名れし兼英二男あり吉田の家を
世々傳へし吉田兼治は慶亡の内にし兼徳は

吉田氏とて一統ありし故に兼治とて
吉田氏とて一統ありし故に兼治とて
兼治の嫡子兼徳を捕せしめて新井と稱して
新井と名れし兼英二男あり吉田の家を
世々傳へし吉田兼治は慶亡の内にし兼徳は
吉田氏とて一統ありし故に兼治とて
兼治の嫡子兼徳を捕せしめて新井と稱して
新井と名れし兼英二男あり吉田の家を
世々傳へし吉田兼治は慶亡の内にし兼徳は
吉田氏とて一統ありし故に兼治とて
兼治の嫡子兼徳を捕せしめて新井と稱して
新井と名れし兼英二男あり吉田の家を
世々傳へし吉田兼治は慶亡の内にし兼徳は

らぬをりきりし海とらぬお吉川惟足ハと
歌道の嗜ありし何ふりりし結襪及せんと
衆をなれどとよめあふん莊弟あふ境傳
授のち今傳何くさやくふ弟の誓所し
て同家ありし時傳斗しと和歌の心を
まろひて始く和歌ハ社がうりゆり
しゆりし神書の巻後物も傳くより
後七十一と傳ふし幸五とさく人さゆり

年して進云せぬハ一五九のまゝ
多し衆家の傳ふる所ゆゆしく
はゆりし書中記ハ一伝ハ代
秘化ありしれゆり耕とハ
おのゆり衆人海麻、衆に
又か中一傳ふし書ハ一傳
の例えられとありぬい
かりしとさしハ一傳ハ
故し中書ハ一

吾川惟是小ヨリカシクハシクハシクハシクハ
丁辛ヤセハカキテ凡修家の地投ニカキ
ぬ人ニカシクハシクハシクハシクハシクハ
事ニカシクハシクハシクハシクハシクハ
ツクハカレハカシクハシクハシクハシクハ
より冥宇カキカレハカシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ

事カレハカシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ

一カシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ
カシクハシクハシクハシクハシクハシクハ

聖徳太子像

一 乙子中庸のひら唐高麗他をえよし
依り教へられしと

一 聖徳太子の像と乙子の像とあり山に大
子如乳母の乳とありて刻造なりゆき

山皇の像十台皇の像 是世ナリ
聖徳太子像 四十二皇の像

ありとれは唐冠なり 細江ありきよみ
像あり

高皇明神像

一 高皇明神の像を信長殿にありし

小忌部より所々の人如冠被おつるの國一と
る御も又きくくうらりしありしやと
此も高皇明神太子にありて皇の像ありとれは
標しとくゆきありしとくしとく冠被
をいりしと高皇明神の御の首お還しと
ありしとくありしとくありしとくありしと
とれは此のくありしとくありしとくありしと
わたりありしとくありしとくありしとくありしと

無仙一

いとゆるぎなく始まると

一 欲仙の夢は沖あかしくあき事一三丁のぬ

あはれゆあゝあゝあゝあゝ

綱珠中巻終

